

【2014/10/4 経済学部ワークショップの様相】
《近代滋賀県の産業発展と女性の労働・生活・教育》



近代における近江商人・夫人の「内助」

亀井大樹（大阪大学大学院博士課程）

今回は、昭和10年に淡海高等女学校長渡邊千治郎と水口高等女学校長太田誠一郎の共著である『近江商人の内助 湖国名婦傳』をテキストに、亀井大樹氏に、その内容を報告していただき、様々な論点を指摘いただいた。本書は、大正デモクラシー以降、女性の権利拡大・「新しい女」の主張が高まる中で、むしろ、市井にある近江商人の夫人や常民の婦人の暮らしや労働、家を実質的に切り盛りし、夫を補佐しつつ家業を管理し、家族を扶助する能力等の中にも婦人ならではの価値を見出し、それを婦人教育にも活かしていこうという意図で、滋賀県下の婦人の活動事例を近世から近代にかけて収集、記述されたものである。

ここに見られる女性の自立や「内助」の役割等をどう評価するかという課題は、戦前の母性保護論争から現在におけるジェンダー論、安倍内閣で進められている女性能力の活用政策等を論じる際にも常に議論となる問題を多数含んでいる。

報告では各郡ごとの婦女子の活動を丁寧に分類し、その実態を次の3つのタイプに整理された。

- ①夫の早世や虚弱体質、病等の環境の中で貧困と病苦に対し、深い愛情と忍耐、刻苦勉強、仏教への熱い帰依によって、病人を看護し、子女を教育し、家政を立て直し、公共に尽くした姿が記録されているもの。
- ②商人の家に嫁し、夫を支え、助け、家を守り、舅姑に仕え、子女を教育し、家運の興隆を縁の下から支えた事例。
- ③嫁した家で、夫よりも進んで事業や商売の拡張をすすんで実践し、女性実業家としての側面を強く感じさせる事例。

報告後の討論では、こうした婦人たちの「内助」の中味や近江日野商人のいわゆる「関東後家」の成立過程、さらに婦人たちの様々な資質や社会関係との関連性について、様々な観点から検討が加えられた。またこうした婦人たちの活動と、県下に次々に設立されていった女学校との関連についても議論が深められた。次回はさらに文献を探索し、より突っ込んだ報告を順次行っていくこととなった。参加者7名。（文責：筒井正夫）